キャラクター名: 桐月 純佳(とうげつ すみか)

プレイヤー名:

シンドローム	バロール バロール	ワークス	UGNチルドレンA	カヴァー	高校生
オプショナル		年齢	高校生	性別	女ではないぞ男だ
覚醒	渇望	衝動	恐怖	初期侵食率	34 %
出自	資産家	経験	仲間の死	邂逅	秘密

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	1	0			1
感覚	2	0	0			2
精神	4	0	0			4
社会	2	0	0			2

HP	26
行動値	8
(非装備時)	8
戦闘移動	13
全力移動	26

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	2		射撃			ＲＣ	1		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達		
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
コネ：UGN幹部	
思い出の一品/指輪	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
Dロイス:対抗種(ｶｳﾝﾀｰﾚｾﾞﾈｼﾞｨﾄﾞ)	P	N		
梅塚　颯人(うめづか　はやと)	P 友情	N 劣等感		
桜井　鈴	P 好意	N 隔意		
くにおびさん	P 幸福感	N 嫌気		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:	4	残り財産P：	1

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：	コスト分のHPで復活							
時の棺	1	10	ｵｰﾄ	視界	単体	自動	100↑	
効果：	判定を失敗　1ｼﾅ1回							
覇皇幻魔眼	5	5	ﾒｼﾞｬｰ	-	単体	対決	80↑	
効果：	射撃　攻:Lv*5 同ｴﾝ不可　1ｼｰﾝ1回							
黒の鉄槌	3	1	ﾒｼﾞｬｰ	視界	-	対決	-	
効果：	射撃　攻+Lv*2+2　同ｴﾝ不可							
黒星の門	1	2	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	-	ピュア	
効果：	同ｴﾝ不可を可に。判D+Lv個							
魔王の理	3	2	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	対決	-	
効果：	攻+Lv*2							
CR:バロール	2	2	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	-	-	
効果：	C値-Lv							
因果歪曲	3	3	ﾒｼﾞｬｰ	-	範囲(選択)	-	-	
効果：	対象範囲(選択)に　同ｴﾝ不可　1ｼﾅLv回							
黒星粉砕	1	4ｄ10	ﾒｼﾞｬｰ	視界	範囲(選択)	自動	120↑	
効果：	組み合わせ不可　(Lv+5)DのHPダメ　命中無　1ｼﾅ1回							
ディメンジョンゲート	★							
効果：	どこへでもいけるぜ？							
変貌の果て	★							
効果：	覚醒時に外見が変貌した。							
効果：								
効果：								
効果：								

「俺様のことが知りたい？くくっ…俺様は！」
桐月 純佳(とうげつ すみか)は高校生のUGNチルドレンである。
右目には眼帯、両腕は包帯が手の先から肘まで巻かれている。典型的な厨二病な見た目、そして、厨二病な言動から、周りに遠巻きに見られている。また、身長は男子にしては低めで、名前が女っぽいので、それについてバカにされることもしばしばある。しかし、彼は自分のことを特別に思っているので、下界の住民が何を言おうとも何とも思わない、らしい。

そんな彼だが、決して交友関係がないわけではなく、時々見せる素の誠実さと彼の現在に至るまでの経緯を知っている人は彼と絡んでくれる。

彼の両親は桐月グループという大きな企業の重役であり、そこそこの金持ちであった。数年前に上層部の身内もめが起きてその地位は失墜、両親ともに蒸発しため、その後は祖父母に引き取られた。

突然両親がいなくなり、新しい環境に移るも祖父母は冷たく、都会から地方に移ったため、その文化の違いになじめず、彼は一時期孤独に過ごしていた。しばらくした頃、その町にやって来たのが、【梅塚　颯人(うめづか　はやと)】だった。【颯人】も都会人だったために、クラスでは浮いた存在になっていた。当時幼かった【純佳】は彼に親近感を覚え近づいて行った。やがて、山や河といった遊び場をふたりで開拓するようになった。

その遊びの中、ある日、二人は祠と像を見つけた。珍しさに手をだしてしまったのが間違いだった。それに触れるのは禁忌だった。
ぞわりと背筋を駆け抜ける悪寒、耳をつんざく狂気の笑い声、隣で悶え苦しみだす友人。そして、赤い斑点とともに出血をしだす、己の両腕。
やがて隣人は、【颯人】は、怪人と化して、【純佳】に恨みがましい悲鳴をあげながらその右眼に腕を振り下ろした。
彼の右眼は無惨にも抉れていたが、思考が追い付かない。
ただ、彼は渇望した。死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない　死にたくない

気付いたら化物は吹き飛び、どこにもその姿はなかった。黒い球体が浮かび、その場を赤く染めていた。そして、彼は己の中に感じる何かが、ざわつく何かの殺